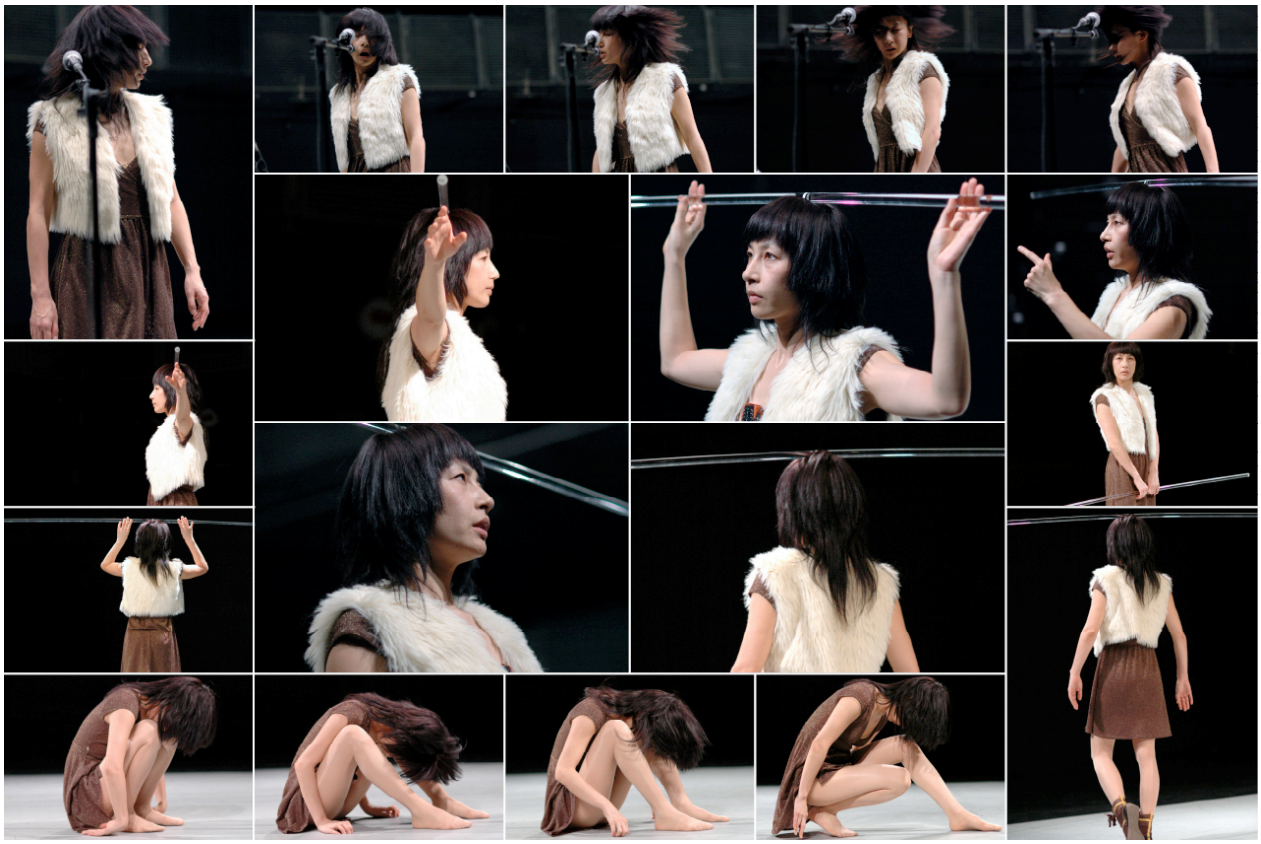
FEELER（ 触角）／　アーティスチック・ステイトメント
竹谷明美（振付家、パフォーミング・アーティスト）



パフォーマンスの中で私は、自分／空間／音の３つの相互関係にある自分のバランスを得たある一瞬を捉える為に、常に自分の行動とその反応の狭間で揺らいでる。何も無い空間に＜ものが在る＞というその瞬間から、空間は全体として”揺らぎ”を生む。その間の揺らぎは＜もの＞と空間とのエネルギーの振動であり、東洋の発想、及び概念である”気”（エネルギー）の知覚である。外の世界・社会に意識を向けるという自己を維持しながら、自分をその中に放り投げて身を任せてみることで、自分という＜もの＞と自分が居る＜ところ＞と自分に在る＜こころ＞の在り処のバランス点を見いだしながら自分を常に観察、確認してます。

この作品、FEELER(触角）の創作の基礎はパフォーマンス性を孕んだ空間に内包する＜動＞と＜静＞の間の対比を明確にすることである。＜動＞においては緊張を解放し、安定と均衡の崩壊を提示する。それは、大概到達するには困難であるだろう精神的解放を目指した肉体的、物理的な表現を示している。＜動＞と＜静＞の２つの相反する空間は、身体的かつ隠喩的であり、その物理的空間、３次元のパフォーマンス空間は”不在と顕示”、及び　”外観と現実”の重要な特性・ニュアンスをもって再定義される。隠

喩的空間は緊張と弛緩を示し、パフォーマンスのプロセスを通じて顕著になるのです。

アーティストとして、私は３つの役割ー文学（書かれた言葉）・身体・声、３つの機能ーアーティスト・プライベートパーソン・パフォーマーを媒体として表現する人格を持ち、それらの相互関係の中で創作活動している。この三角関係は自分の芸術的な内容、方法論的な過程を提示してます。その相互関係にある三角形内での緊張は、身体、音、光、映像の要素が統合された状態で、パフォーマンスかつ身体展示／インスタレーションを通じで芸術的に表明してます。

この３つの相互関係にある芸術的な人格の中には、もう一つ、２つの力で表された不可欠に対抗する自己の分割が存在する。一つは自己賛同する力、もう一つは自己否定する力です。これが、ダイナミックな拮抗を生みだし、この拮抗が自己を動かしている。これらのプロセスを経て、自分を提示する為に体は動き、自分の中の対極する力によって作動されたキネチックな彫刻になるのです。

私はヨーロッパ文化の影響によって確立された声と身体パフォーマンス形体と共に創作作業している。日本人として、私は東洋的なアイディアとヨーロッパスタイルを取り入れ、西洋人パフォーマー、振り付け家には発想的に不可能かもしれない稀なダイナミックなステージを作り上げてるといえる。自分から切り離せない私の東洋的な考え方の想起は、芸術という表現を通して東洋と西洋の両方の美学上での、類似点と反対点を見いだし西洋と東洋のアートの独自な混合スタイルを生んでると思います。

”これは，私のソロ作品の終わり＝始まりのような気がします。ここまで築いてきた身体及びパフォーマンスの概念はここにあります。これは，ワークショップの基礎になってます”
A.Takeya